

(二) 大定十七年以後に於ける金朝の契丹人に対する態度の強硬化

西北遼契丹人の滿洲への遷徙 大定十七年(一一七七)に至り、西南(綏遠方面)、西北(察哈爾方面)兩招討司管内の契丹人にして叛亂にあづかりしものを北滿の上京今ハルビン東南、阿城縣下白城、濟州吉林省農安縣、利州、今の興安南省内と思はれる烏古里、石壘部等に徙して安置せしめることとした。なほ、烏古里、石壘部へは、叛亂に加つた契丹人ばかりでなく、叛亂に加らなかつたもの及び契丹人の奴婢にして許されて良人となつたものをも徙したのである。世宗が再びかゝる武斷的處置を講ずるに至つた動機如何。

契丹人の西遼への逃歸—契丹人滿洲遷徙の動機 これについては種々考へられるが、その直接動機となつたものとして、大定十七年(一一七七)契丹人の西遼國逃歸の事件を擧げること躊躇しない。この年、監察御史完顏頤古速を遣して邊疆を巡らしめた時、これに従つた四人の契丹人吏僚が逃れて西遼に歸したことが即ちこれである。この報に接した世宗は大に憂慮し詔して曰く

大石(西遼國のこと)西夏の西北に在り、昔窩斡亂を爲し契丹人等響應するや、朕その罪を釋し、舊業を復せしめ、使を遣してこれを安輯せしむ。反側の心なほ未だやまず。もし大石人をして間誘せしめんか、必ず邊患を生ぜん。使を遣してこれを徙し、女真人と雜居せしめ、男婚女聘、漸く化して俗となすが長久之策なり金史卷八八 唐括安禮傳

と。

女真人と契丹人との通婚獎勵 世宗は契丹人の向背遂にはかり難く、一朝事あれば西遼と通じ金國の爲に害をなすであらうことを恐れ、彼等を北滿の地及び興安嶺東の烏古里、石壘部等に遷し、西遼との聯絡を斷ち易くし、而して契丹人と女真人とを雜居せしめ、通婚を獎勵するに至つたのである。支配民族である女真人と契丹人との通婚を獎勵するが如きは、契丹人に對する統御策に困じ果てた末のことである。身をすててこそ浮ぶ瀬もあれ、のたとへ、世宗が女真人の血液の純潔を保つといふ小さな誇りを棄てて、女真人と契丹人との通婚獎勵策をとり、女真人自らをも變型しつつ契丹人とのつながりを深めてゆかうとしたのは、その効果如何は別として、思ひきつた政策として賞讃すべきである。

契丹人に對する世宗の惡感情 世宗は、契丹人は結局女真人の味方とはなり難いといふことを看破してゐた様である。従つて契丹人に對しては惡感情をいだいてゐた。契丹人一般に對する抑壓といふことも考へてゐたと考へられるが、これを露骨にあらはすには、あまりに契丹人の勢力は根強く、そして金朝の實力が不足であつた。時恰も本族たる女真人が國家の保護に慣れ、漢文明に心酔して情弱となり、窮乏化してゆくといふ憂ふべき現象を呈したので、これに對し、質實剛健な女真精神の作興につとめ、女真中心主義を政治の上に現してゆくべき必要を感じたので、この方針に従ひ、徐々に契丹人その他の諸族の軍、政兩方面に於ける活動の範圍をせばめてゆかうとした。漢人官僚梁肅が、財政に餘裕を生ぜしむべき方策の一として、諸

官廳に於ける契丹人官吏の數を減ずべきことを進言したに對し、世宗が考慮を拂つてゐる金史卷八 九梁肅傳ことなどは、それがどの程度實行にうつされたかは判らないけれども、契丹人に對する方針を示してゐる。契丹人抑壓は、世宗二十九年の治世をうけついで孫の章宗（一一八九—一二〇八）の時代になつてやや明瞭になつた。

章宗明昌年間に於ける契丹字使用の禁 章宗はすべて世宗の方針をうけつぎ、女真中心主義を徹底させようとしたが、明昌二年（一一九二）四月、有司に諭し

自今女真字はただ譯して漢字となし、國史院専ら契丹字を寫すものはこれを罷めしむべし金史卷九 章宗本紀
といひ、更にその年十二月には詔して契丹字を罷めしめたのである。金は國初以來、自ら作つた女真字とともに、漢字、契丹字を併用し、政府から出す文書も、女真字から漢字と契丹字とに譯せしめてゐたのであるが、契丹字に譯すことを罷めたばかりか、契丹字の使用を禁じたことは、契丹人の生活に對する大なる壓迫であらねばならない。中央、地方に於ける契丹人の官吏としての活動を制約することとなつたことも勿論である。しかし右の如き契丹人制約の方針も、幾くもなくして又異つた方面に於て改變せられざるを得なくなつた。

(三) 章宗時代に於ける北方遊牧民の侵寇と北滿に於ける契丹人の叛亂

承安元年契丹人德壽、陔嶺の亂 章宗即位の頃、即ち大定末（一一八九）以降、興安嶺西に於ける蒙古系遊牧民の活動が劇しくなり、金の西北邊は頻々としてその侵寇を蒙るに至つた。金は明昌三年（一一九二）以來

界壕を開築してこれに備へるほか、同六年以降承安三年（一一九八）に至るまで、屢兵を嶺西の地に出して討伐をなし、辛うじて一時その侵寇を防ぎ得たのであるが、經略に全力を傾けてゐた承安元年（一一九六）十一月、北滿の信州今吉林省懷德縣附近に於て、契丹人德壽、陔嶺が六群牧の契丹人を率ゐて亂を起した。群牧は、軍馬の飼畜、蕃息を事とする機關であり、遼の制度を襲つたものであつた。金代群牧に屬する民は、その任務の性質上、遊牧を事とする契丹人が多かつたことは言を俟たない。

契丹叛軍は身聖と建元し、多少誇大に過ぎるがその衆數十萬と號し、遠近震駭したと傳へられる。叛軍は韓州奉天省八面城附近、信州吉林省懷德縣附近附近を攻略し、懿州錦州省阜新縣附近を犯し、この地方一帯を擾亂の巷と化した。これらの契丹人は、かの正隆、大定年間に於ける叛亂後の處置として、大定十七年（一一七七）この北方に徙された徒輩であつた。金朝の措置に對して反感を懷ける彼等は、金が北方遊牧民に對する經略に全力を傾け、彼等に對する監督の緩んだのに乘じ、その背後に於て騷擾を起し、金朝の治下より脱せんと企てたものと考へられる。結果から言へば、世宗の考案した契丹人と女真人との通婚獎勵もさしたる安全瓣とはならなかつたと見られるが、それにもかゝらず、通婚政策は金朝の採り得る最も思ひきつた政策であつたことを繰返して言つておきたい。契丹人の叛亂が起つたと聞くと、金朝は大に驚駭して討伐に主力をむけた。幸にして金の討伐軍の奮戦によつて亂は半月ばかりで平定することができたが、北方に事を構へてゐることとて、金朝の苦慮は深刻であつた。北方遊牧民の侵寇はさまで恐るゝに足りないが、背後に於て擾亂を起す契丹人こそは最もおそろしい

存在である。とは金將完顔裏のいつはらない告白である。

滿洲に於ける虜軍の擾亂 契丹人の叛亂は鎮定せられたが、それはまた虜軍を刺戟した。承安二年（一九七）には虜軍千餘が錦州今錦州、遼寧省阜新縣附近の間に出没した。虜軍とは前述の如く、北方遊牧民に對する防壁として西北邊に配置した契丹人を始めトルコ、蒙古、タングート系諸部族人を以て編成した、外人部隊ともいふべきものである。叛亂は幾くもなく鎮定を見た。金朝は虜軍が契丹人と合して事を起すことを恐れ、これを金の首都である中都今北京附近に徙しこれを慰撫するとともに警戒することとしたのである。

北方經略に於ける漢人の離畔と金朝の對契丹人政策の變化 北方遊牧民に對する討伐戰に於て、屢々女真軍の弱さが暴露せられた。女真軍が弱くなつたと心附いた漢人官僚の中には、兵站を掌つて從軍すべき地位に在りながら、從軍を忌避するが如き態度を見せるものさへ出て來た。これは女真人の戰鬥力に對する漢人の不信任でなくて何であらう。金朝は最も憂慮すべき事態に早くも直面することとなつたのである。

漢人の離畔はこの點だけから生じたものではない。女真人の戰鬥力低下の原因は彼等の貧窮にあるとの見地より、金朝は彼等の生活を保障すべく、官地にして無斷で漢人の耕作してゐるもの、民地にして税を納めないものを沒收して、これを女真人戸に與へるといふ方法を選んだ。こゝに於てか土地問題をめぐつて漢人の金朝に對する反感は次第に深刻化した。かうした所にも漢人が金朝の政治に不満をもち、女真人と相反した立場にたつ様になりゆく素因が認められる。

金朝は、世宗以來これを抑壓せんとしてゐた契丹人をば再び好遇することによつて、内燃しつゝ、あつた漢人の反感を制してゆかうとするに至つた。泰和元年（一二〇一）四月に至り、契丹人戸にして軍に徵せられて功を立てたものに對する官賞恩例を女真人と同様にしたのは即ちこの政策の具現である。北滿に於て契丹人が叛亂を起してより僅かに數年の後に、契丹人に對して右の如き待遇を與へたことは、金朝の漢人に對する感情の惡化を物語るものにほかならない。漢人に於て失はれた所を、契丹人に求めんとする心持であつた。

（四）蒙古の侵入と北滿に於ける契丹人耶律留哥の叛亂—金朝の滿洲喪失—

蒙古の侵入 北方經略による金の財政難は宋側の聞知する所とならずにはをらなかつた。恢復の業を成し遂げんと機會を覘つてゐた宋の韓侂胄は、反對派を排斥して對金開戰を唱へ、章宗泰和四年（宋嘉泰四年、一二〇四）以來しきりに金の南、西邊を侵した。金は初めは不擴大主義を執つてゐたが、遂に同六年宋に對して開戰を宣した。戰は金側に有利に展開したが、戰爭の終結の速かならんことを望む金側は、有利な状態を利用して泰和八年（宋嘉定元年、一二〇八）和を結んだ。しかるに、金の財政難は對宋戰によつて一層深刻となつた。金軍の前進根據地、軍資調達地となつた山東方面には群盜が發生した。この年章宗崩じ、叔父にあたる衛紹王が立つて難局にあたることとなつたが、即位の第三年たる大安三年（一二一一）、北方より北方遊牧民の生んだ英傑成吉思汗のひさるる蒙古軍の侵寇をうけ、金國の上下は不安動搖その極に達した。かくの

如き金の國難に乘じ、北滿に於ける契丹人は遂に蒙古軍に應じて金朝に叛旗をひるがへしたのであつた。

耶律留哥の蒙古への内附

金朝は北滿在住の契丹人が蒙古軍に内應することを極度に恐るゝ、これに對

する處置を怠らなかつた。その對策として金朝が選んだのは、契丹人戸一戸に對し、女真人戸二戸を配して以て夾居せしめるといふ方法であつた。契丹人の動靜を察し、これを制約するには最も有効な方法と考へたのである。しかるに、かうした金朝の態度は契丹人に不安の感を與へたのである。契丹人耶律留哥は、北邊守備の任を有する千戸(猛安)であつたが、かうした金朝の處置に、その身の不安を感じ、上京今ハルビン東南、阿城縣下白城

泰州この時の泰州は今吉林省扶餘の西方に在り

等、當時滿洲に於ける要衝の守兵が國都防衛の必要上中都北京に移された虚に乗じ、

任地より逃れて隆州今吉林省農安縣

に至り、壯士を糾合してその地方を剽掠し、勢益熾となり、衆

十餘萬を算するに至つた。時に大安三年(一一二二)秋である。

留哥はその翌、興安嶺を越えて遼東に進出せんとする蒙古の將軍按陳那衍に會ひ、蒙古に内附した。蒙古軍の援を得て金の支配を脱せんとしたのである。金朝の恐れた所は遂に事實となつた。契丹人は金朝の苦心經營の甲斐もなく、遂に女真人の味方ではなかつた。間隙ある毎に事を舉げんとする契丹人の民族的團結の底力は實に執拗といふべきであらう。そして屢次の叛亂に於て、外部の勢力一例へば西遼、西夏の如き一との結びつきは企てられるには企てられたが、何れも實現しなかつたけれども、留哥の場合に於ては、金の最も恐るべき強敵蒙古と手を結び、兵備の薄い滿洲の地に蒙古軍を誘ひ入れることとなつた。契丹人を西北邊

に配し、北方遊牧民の侵寇に對する防壁たらしめんとする國初の方針は、全く昔日の夢と化してしまつた。

耶律留哥の自立

金朝に於ては今の晉北、察南方面の諸州を攻陥して國都を脅さんとする蒙古軍に對す

る防禦に忙殺せられ、遼東の動搖に對して處置を講ずる暇がなかつたが、蒙古軍が東京遼陽を攻めて引揚げると及び、遂に將を派して留哥を攻めた。滿洲は金朝にとつては根本の地である。今や北支那の地が蒙古軍の馬蹄下に蹂躪せられんとするや、故郷の地を憶ふの情一入深きものがあつた。世宗の國粹鼓吹の運動にもかかはらず、次第に忘れさらんとしてゐた滿洲の地ではあつたが、ここに至つては、この地の喪失は實に金朝にとつておそろべきものがあつた。

しかるに金の討伐軍は、留哥と蒙古軍との聯合軍のために破られた。金軍を破つた留哥は、崇慶二年(一一二二)三月、自立して王となり、國を遼と號した。遼といふ國號をふたたび用ゐ、遼の再興を以て任じた所に、契丹人たる耶律留哥の抱負を窺ふことができる。

金室の南遷と金將蒲鮮萬奴の留哥討伐失敗

蒙古軍は崇寧元年(一一二二)一度金の北邊を去つたが、留

哥が自立して國を遼と號した崇慶二年(至寧元年、貞祐元年一一二三)七月、再び來り、今の察南地方を席捲して中都北京の附近に會した。これと前後して金の衛紹王(一一〇八—一一三三)弑せられ、衛紹王の兄の子にして章宗の異母弟にあたる宣宗が迎立せられた。蒙古軍は河北、山西、山東方面を攻略し、翌貞祐二年(一一二二)三月、中都攻圍にうつらんとしたので、宣宗恐れて和を乞ひ、四月和議成立、蒙古軍は北歸した。然

るに金に於ては蒙古軍の重壓を恐れ、遂に五月には都を中都より南京汴京、今に遷したのに遷したので、成吉思汗の怒りをかひ、再びその攻略を蒙るに至つた。

南遷に際し、金の宣宗は蒲鮮萬奴に遼東鎮撫の大任をゆだね、留哥を伐たしめることとした。北支那に於ける金朝の悲運は、根本の地である滿洲への復歸といふ一事を金帝に思ひうかべしむること一入であつた。故に南遷の混亂時に於てさへ、滿洲の地の確保を目的とする軍の派遣に力を注いでゐるのである。しかし蒲鮮萬奴は却つて留哥に破られて東京遼陽、今にに走り、他の金將の討伐も失敗に終つた。留哥は盡く遼東の州郡を領有し、遂に咸平今開原に都し、ここを中京と號した。時に貞祐二年(一一二四)九、十月の交である。

この頃恰も山東に於ては羣盜楊安兒が跳梁してゐたが、彼は、實行には至らなかつたが、使を遼東に遣し、留哥と提携せんことを企て、ゐる。海路、山東より遼東に通ずる交通路は、金朝に於て確保すべきものであるにもか、はらず、金室南遷より後は、山東に於ける金の勢力が掃せられた結果、金人によつては早くも企て及ばざる状態となつてゐたのであつた。海路による滿洲との聯絡が困難となつては、金朝の滿洲確保の望も薄らいだ譯であるが、更に、留哥討伐に派遣した蒲鮮萬奴が金に叛いて自立するに至つては、全く絶望とならざるを得なかつた。

蒲鮮萬奴の自立

滿洲に於ては契丹人耶律留哥の勢さかんにして金軍の討伐意の如くならざる内、再び

金領内の攻略を開始した蒙古軍は、留哥の請により、貞祐二年(一一二四)末より將軍木華黎を派して遼西に進出せしめた。翌年正月木華黎は北京今熱河省寧城縣大名城を降し、その裨將は東京今遼陽を略取した。さきに留哥を伐つて敗れ、東京に逃れた金將蒲鮮萬奴は、さき頃よりすでに異志を蓄へてゐたのであつたが、契丹人は留哥に率ゐられて蒙古軍に與したといふ事實に刺戟せられ、金の勢力すでに地を拂ひ、蒙古の勢威漸く盛ならんとする情勢に應じ、女真人を糾合して遼東の諸州縣を攻略し、十月自立して大眞國大王と稱した。こゝに於て金朝の滿洲確保の夢はうちくだされた。

金の滿洲喪失

その後留哥の遼國に於ては兵變あり、留哥監督の蒙將は留哥を逐うて契丹人を率ゐたが、

動搖を看破した金軍のために破られ、翌貞祐四年(一一二六)咸平より澄州今海城に都を遷した。留哥は成吉思汗に慰撫せられ、蒙古軍の援護の下に、彼を追逐した偽遼國を伐つこととなつた。偽遼國の契丹人は、萬奴の國の一隅に踞するを嫌ひ、東邊道より鴨綠江を渡つて高麗に進出し各地を横行すること三年に及んだ。蒙古軍は遼西より遼東に出て萬奴を下し、鴨綠江下流方面にまで經略の手をのびした。萬奴は翌貞祐五年(一一二七)再び自立して間島地方に移動したが、興定二年(一一二八)又蒙古軍に降り、三年正月、蒙古と兄弟の約を結んだ高麗軍、蒙古軍及び留哥の軍に合してともに大同江畔の江東城に於ける偽遼國契丹人の討滅に従つた。偽遼國の餘衆である契丹人は、もとの統率者留哥に與へられ、留哥の根據地となつた臨潢府興安省にうつされたが、その翌興定四年(一一二〇)二月留哥死し、蒙古軍の援助をうけた契丹人の金朝に對す

る反抗運動は一應こゝに終つた。金朝の對契丹人政策の見るべきものもこれで終つた。蒙古の太祖(成吉思汗)は興定三年(一二一九)より西域征伐の途に上つたが、蒙古軍が滿洲より引揚げると萬奴、高麗ともに蒙古に叛き、遼東方面には金の勢力が衰へながらもなほ存続した。それより七年の後なる正大二年(一二二五)に至つて遠征より歸つた成吉思汗は、自ら西夏を征する途上に歿し、太宗(窩闊台)が位に即いたが、彼は正大七・八・九年(一二三〇—一二三二)にわたり撒里台を遣して遼東、高麗を經略した。天興二年(一二三三)貴由のひきゐる蒙古軍は萬奴を滅し、こゝに於て滿洲の地はあげて蒙古の支配下に入つた。金の本國の滅亡した前年である。

契丹人耶律留哥の叛亂は、かくて蒙古軍を金の根本の地たる滿洲にひき入れ、金國をして最後に適歸すべき地を完全に失はしめ、その滅亡の期を速めたのであつた。

金朝は遂に滿洲に於ける契丹人に叛き去られた。金朝に仕へた契丹人官僚にして、金のために殉じた人もないではなかつたが、それらは比較的契丹人としての意識をもたず、むしろ金朝の官僚になりきつた人々であり、その數に於てももとよりさほど多くはなかつたのである。故に、結局金は契丹人を味方につけ得なかつたといはなければならぬ。これに關聯して考へられるのは、契丹人をはじめトルコ、蒙古、タングート系諸部族より成る、邊疆防備の任務を有する虜軍の動靜である。

虜軍の青報

さきに章宗の泰和年間、天山蒙疆百靈山附近の虜軍を以て伐宋軍の先鋒となしたといひ、又衛紹王

大安三年(一二二二)蒙古軍が金の北邊を侵すや、秦州吉林省扶餘縣の西方刺史であつた尤虎高琪が、虜軍三千を以て中都今北京通玄門外に屯し、又鎮州秦南廷慶縣を守つたことが傳へられるが、元來西北邊に在つて北方遊牧民の侵寇に對する防壁たるの任務を有する虜軍を、内地に於ける戰鬪に用ゐたことは、それ自體金の兵力の減退を物語る。貞祐二年(一二二四)、宣宗が中都を立つて南京今開封に遷らんとした時には、虜軍を如何にすべきかが論議せられ、これを中都の東北方平州今河北盧龍縣に置かんとしたが、虜軍を率ゐる尤虎高琪がこれを承諾しなかつたため、ともに南遷せしめることとした。しかるに彼等は南遷を快しとせず、涿州今河北涿縣まで行つた時、隊後に在つた虜軍が叛いて中都にかへり、中都の守將の兵を破つて勢大に振つた。金朝大に驚き、武力を以てこれを討伐するといふ方法をとらず、契丹人移刺塔不也をして招誘せしめたが、虜軍はこれに應ぜず、遂に蒙古軍に降り、その郷導となつて中都攻圍に加つたのである。ここに於てか、金朝は虜軍をも失つたのである。河南に跼踏し、北は蒙古、南は宋、西は西夏と三方に敵をひかへた興定二年(一二二八)に至り、契丹人移刺福僧が上書して

今の計を爲すに、惟ふに先づ虜人を招徠し、虜人にして舊とより宿望雄辯ある者を選択し、諭すに恩信を以てす、彼もし内附すれば、然る後に中都復すべし、遼東通ずべし金史卷一〇四移刺福僧傳などと、この期に至つても、望を虜軍にかけてゐるが、これが實行に移さるべくもなかつたことはいふまでもなす。

契丹人以下諸部族に對する優遇法 宣宗が即位すると、金廷に於ては、契丹人を始めその他の諸部族人（即ち諸色人）に對する待遇を改善して、貞祐元年（一一二二）十月には詔して

あらゆる、官を遷し賞を加ふべき諸色人は、本朝人（女真人）と一體ならしむ 金史卷一四 宣宗本紀

といひ、貞祐二年（一一二四）十月には

諸色人の武舉を試みるを許す 右

貞祐三年（一一二五）二月に詔して

諸色人の選官は並びに女真人と同じくす。有司妄りに分別を生ずれば、違制を以て論ず 右

同年九月には

諸色人功を以て國姓（完顏）を賜ふ者は、能く千人を以て敵三千を敗る者は賜姓の範圍を總麻以上の親に及ぼす。二千人以上を敗る者は大功以上の親に及ぼし、千人以上の者はただその家にとどむ 右といひ、北支那在住の契丹人以下諸部族に對する優遇の途を開き、その歡心を得んとしたのであつたが、肝心の金朝の威信地に墜ちては、彼等の心を繋ぐべくもなかつたのである。虜軍招徠策も遂に功を奏せず、むしろ飼犬に手を噛まれたといふが如き結果を招いたに過ぎなかつたのである。

結 語

金は建國後幾くもなく南方の漢人國家宋との交渉を生じ、遼に對する夾攻の約を結び、長城以南に進出したが、遼室討滅の宿望を達した天會三年（一一二五）宋の背信行爲を怒つて伐宋の軍を起すや、騎虎の勢に乗じて中原の地を領有するに至つた。自來南進政策はやむにやまれぬ金の國是となり、南進の勢がその限度に達して後も、江南の宋と相對しながら、治下に入つた多數の漢人を統御すべく、二百萬に近い女真人を中原に徙したのであるが、終には金室自身の中原進出までもが行はれるに至つた。かくて、宋を當面の敵とし、漢人の統御を第一義として、國家百般の態勢を整へたのであつた。

遼の天祚帝を擒捕すべく内蒙にのびた金の勢力は、遼帝擒捕の後は發展の機會なく、まして内外蒙古の遊牧諸部族に對する經略はこれを行ふ餘裕がなかつた。元來女真人は、契丹人が遊牧の生活を送るのとは異り、半農半獵を生業とするから、西北邊の比較的農耕に適しない地方に對する領有慾は稀薄であり、又沙漠の戦は不得手であつた。故に西北邊には、契丹人及び金の羈縻に服した諸部族を配置し、これを北方遊牧民に對する防壁たらしめんとした。かくて西北邊に於ては遼の制度を殆どそのままに踏襲し、最高機關たる招討司の如きもその名稱は遼の通りとなし、その官屬は金朝に對する忠誠の念の深い契丹人及び諸部族人を選んでこれに充て、女真人官僚が任命せられることがあつても、それは彼等を監督する程度にとどめた。従つて金

のこの方面に對する控制力は微弱といはざるを得ない。自らの非力を悟つた金朝は、南進政策に専念できざるやう、彼等を金朝の味方につけるべく、彼等に對して懷柔の方針を以て臨んだのである。内地に於ても同様に懷柔の方針を用ゐた。女真固有の社會組織に従ひ契丹人を猛安謀克に編成したが、その長たる猛安謀克は契丹人の中より選んでこれを任じ、その職を世襲せしめ、天眷三年（一一四〇）遼東に於ける漢人、渤海人の世襲猛安謀克を廢止して後も、契丹人にはその特權を世襲せしめるといふ恩惠を與へた。この頃金の記録には、契丹人に對する社會上の差別待遇の事實が殆ど片鱗さへも見せないのは、契丹人に對する金朝の懷柔政策を反映するものと見てよからうと考へられる。この方針は勿論全然成功とはいへないが少くとも失敗とは言へない。この期間に於て、耶律余睹、蕭裕等の叛亂の計畫があり、その計畫には西北邊の契丹人が登場するけれども、それは何れも金の官僚となつた契丹人であり、その運動は比較的上層の契丹人とゞまつた。故に亂後に於ても、格別に對契丹人政策に變革の要を認めなかつたのである。

しかるに正隆大定年間に於ける契丹人の大叛亂は金朝の對契丹人政策に變化を與へずにおかなかつた。正隆末年（一一六一）海陵王が國力を賭して南伐を敢行するに當り、西北路（察哈爾方面）の契丹人の壯丁を殘らず徵集せんとしたのは、西北邊防備といふ彼等に課した任務を忘れたものであり、且又西北邊に於ける金の實力の微弱であるといふ事實を反省すれば、なし得ない筈の行爲であつた。失敗はこゝに生じた。叛亂の進行に従つて、局面の變化に應ずべき處置は講じたが、伐宋に主力を注いで叛亂鎮定に重きを置かなかつた爲


に叛亂は擴大した。世宗の懸命の努力によつて叛亂は鎮定せられたが、世宗は眞劍に契丹人統御策を考へた。大定三年（一一六三）契丹人の猛安謀克を廢止し、これを女真人猛安謀克に編入せしめることに決したが、その翌年にはこれを緩和し、叛亂に加らざるものは從來通りにしてゐた。しかるに、大定十七年（一一四七）、契丹人が中央アジアに建てられた契丹人の國西遼に逃歸した事によつて、契丹人はこのまゝでは結局は金朝の味方とはなし得ないと考へた世宗は、亂に與した契丹人はもとより、亂に加らなかつた契丹人も、北滿、興安南省の二地方に徙し、西遼との聯絡を斷ち易くし、彼等を女真人猛安謀克内に編入し、而して女真人との通婚を奨励し、これを長久の策なりとしたのであつた。

その後金朝の契丹人に對する態度は、時に嚴しく時に緩く、金朝の國粹運動、對漢人政策などとも關聯をもつて變化したが、章宗時代、北方遊牧民の侵寇に悩むや、北滿に徙された契丹人は、この虛に乗じて叛亂を企てるに至つた。これは幾くもなくして平定せられたが、衛紹王の時代、蒙古が滿洲に侵入せんとするや、契丹人耶律留哥は、蒙古に内附して蒙古軍を滿洲にひき入れ、金をして最後に復歸すべき根本の地を失はしめるに至つた。これは金室ならびに女真人にとつて大なる不幸といはなければならぬ。

要するに、契丹人は遊牧の民であり、定住して狩獵と農耕との生活を送る女真人とは事情を異にし、兩者はいはば融合し難い存在であつた。遼を滅して後、契丹人の統御に特別の工夫をこらして然るべきであつた。そして契丹人を完全に統御するには、是非とも西北邊の經略を徹底的に行ひ、蒙古系遊牧諸部族ににらみを

をかせる程の兵力をこの方面に配し、西遼、西夏等との聯絡を断ち得るやうにしなければならなかつた。しかるに、早く宋との抗争を生じ、外に向つては對宋政策、内に於ては漢人統御を第一義として國家體制をととのへ、そして自らも支那文化に心酔し、支那化してしまつた。契丹人に對して懷柔政策をとつたのは、契丹人統御に對する特別の工夫を拂ふ餘裕なく、且契丹人を完全に壓へつける程の實力をもたなかつたからである。強硬軟弱何れの途をも選び得るといふ状態にあつてこれを選んだのではなく、實にかくせざるを得なかつたのではあつたけれども、これは少なくとも自國の實力を知悉した、最も賢明なゆき方であつたと考へられる。これに反して、海陵王の強制徵兵は、契丹人の内情、金朝が彼等に課した使命を省みぬ暴舉であり、契丹人の金室に對する感情を急激に悪化せしめた。ここに未曾有の大叛亂となつた。その後の對契丹人政策は、彼等を金朝の味方につけるといふ所までには至らず、彼等に叛亂の機會を與へまいとするに過ぎなかつた。一旦失はれた、金朝の不信は遂に如何ともなし得ずに終つた。金朝の對契丹人政策の失敗の主因は、海陵王の暴舉にもとめられねばならない。

用印會社記いSONISS資



昭和十九年十一月十日印刷
昭和十九年十一月十五日發行 (一、〇〇〇)

吳民族の支那統治研究
清朝の邊疆統治政策

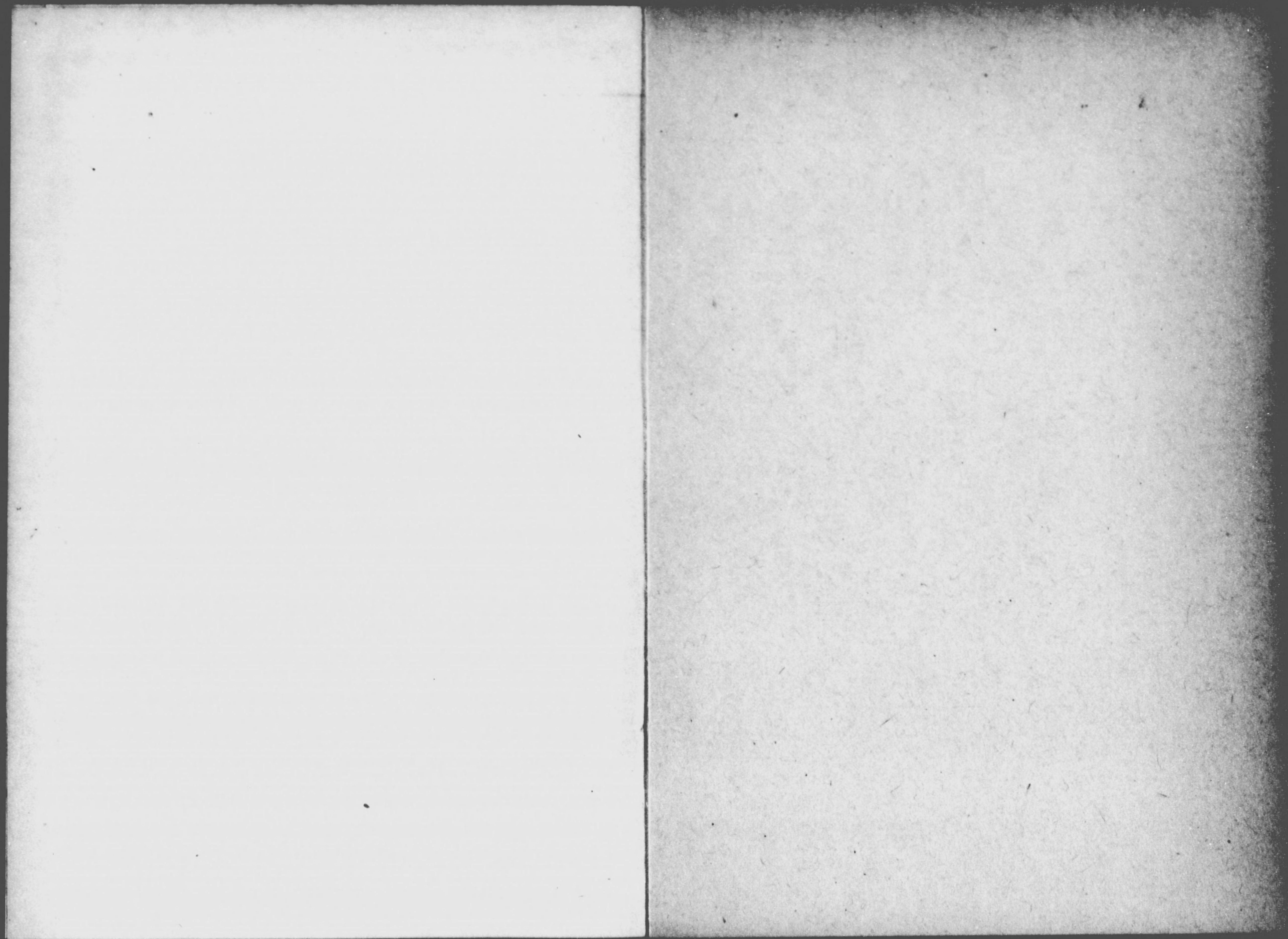
定價 七圓五十錢
特別行爲 金 五十錢
印刷費 金 八圓
合計 金 八圓

東亞研究所
東京都牛込區神方町二十七番地
佐藤正 叟

發行所
東京都牛込區神方町二十七番地
至文堂
會員番號三四〇〇四七番
電話牛込(34)四四五五番
振替口座東京二九五〇七番

東京五二 三給印刷株式會社印刷

東京都神田區渡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社



988
134

20年 / 月27日

16

0/0									

